



道中だより

第 369 号

令和2年1月31日発行

・巻頭 宣言
・全日中大 報告
・論 文芸
・特別寄稿・文芸
・さりながら
・後期情報誌
・事務局 日誌



作品名「冬の芦別岳を望む」 名寄市立名寄東中学校 野宮 勉



不寛容な時代に学校は…

江別市立江別第一中学校 新田 元 紀

○か×か？ 白か黒か？ 敵か味方か……。 「△」も、「ちょっと濃い目の灰色」も、「ある面では味方」もない世界は極めてわかりやすく、過剰なバッシングは時に熱狂を生むのでしょう。ネット上の言葉だけではなく、討論番組でも「○か×か？」の議論が多いように思います。もちろん“芸”として発言している人もいるのですが…。

最近、学校で受け取るお叱りは、大抵の場合、悪いのは“全て”学校・先生です。

「教室で注意を受けた。子供は傷ついた。ある意味、体罰だ。先生として信頼できない。先生をやめてもらいたい……。」

その先生の良さなど「0.01」も認めない。

学校や先生が全て否定される。そんなとき、「敵か味方か？」のような、「わかりやすさ」を求めてしまいそうな自分がいて、ぎょっとします。

「注意を受けるような子供が悪い。」

「クレームを受けるような先生が悪い。」

この不寛容な時代、学校は、特に私たち管理職は、あらゆることを真摯に受け止め、「世の中は『敵か味方か？』だけではない。認め合いながら生きて

いかなければならない。」、「『○か×か？』など、わかりやすい話はない。」ということを根気強く伝えていかなければなりません。それは、保護者・地域、生徒だけではなく、「あの生徒は～だから。」 「あの保護者は～だ。」と決めつける先生方にもです。

勝ち負けが重要視され、単なる教育相談に弁護士が入るようなことも起こっています。弁護士が入って困ることはないとしても、それはもう、信頼の上で成り立つ“教育”ではないでしょう。

「パワハラ」、「教師間のいじめ」、「理不尽なクレーム」…。そんな状況を考えると、少なくとも学校は「不寛容な時代」に巻き込まれることがあってはなりません。毅然とした対応を胸に秘めながら、懐深く、ある意味では宗教家のような寛容の精神で向かう必要があるのではないかと考えています。

北風と太陽の寓話ではありませんが、せめて学校が「太陽」でなければ次代の「太陽」は育ちませんし、社会がますます息苦しくなってしまいます。

でも、それは働き方改革のベクトルとは、向きがちよっと違ってくるような気もしますが…。



第70回全日本中学校長会研究協議会 群馬大会報告

第70回全日本中学校長会研究協議会群馬大会は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を研究大会主題とし、全国各地から1,800人を超える会員が参加し、ベイシア文化ホールを主会場に開催された。

3日間の日程と主な内容について報告する。

【第1日 10月23日 (水)】

- 11:30～13:50 全日中常任理事会
- 14:00～17:00 全日中理事会
- 13:30～14:30 全体協議会運営委員会
- 15:00～17:00 分科会運営委員会
- 18:00～20:00 歓迎の集いレセプション

【第2日 10月24日 (木)】

- 9:30～10:20 開会式
- 10:30～12:20 文部科学省説明 全体協議会
- 13:45～16:45 分科会

【第3日 10月25日 (金)】

- 9:15～9:40 アトラクション
- 9:50～10:10 全体会
- 10:20～12:35 記念講演 閉会式

◆文部科学省説明

「当面する初等中等教育上の諸課題」

文部科学省大臣官房審議官初等中等教育局担当
矢野 和彦 氏

以下の13点について重点的な説明がなされた。

(1) 新しい時代の初等中等教育の在り方について

知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」が学力水準を高めた(OECD・PISA2015において数学的リテラシーが加盟国中1位)が、児童生徒の語彙力、高校生の学習意欲の希薄化、いじめの発生件数が過去最多等、社会の急激な変化による課題



が顕在化した。これらの状況に対応していくためにはSociety5.0時代に必要とされる読解力、情報活用能力、表現力、協働的な学びを通して解を生み出す力を育成するとともに、先端技術を活用し、学びの変化に応じた教育を実現できる教師の資質・能力の向上、環境整備が必要である。

(2) 新学習指導要領の円滑な実施に向けて

令和2年度からの新学習指導要領全面実施に向けて、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を明確とした社会に開かれた教育課程を編成する必要がある。特に外国語においては令和6年度まで、毎年、児童が学んでくる時間数や既習内容が変わるため、小中間における授業参観や教材・指導計画の情報交換が重要である。

(3) 学校における働き方改革の推進について

平成28年度の勤務実態の調査においては、10年前の結果に比べ、授業準備、成績処理、学級経営、部活動を理由に勤務時間が増加した。対応策として、勤務時間の把握と管理、部活動ガイドラインの遵守、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー等の外部人材の活用が進められており、さらに、1年単位の変形労働時間制の導入が検討されているところである。

(4) 教育の情報化の推進について

新学習指導要領においては、情報活用能力が言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられた。中学校技術科では「計測・制御のプログラミング」に加え、「ネットワークを利用した双方姓のあるコンテンツのプログラミング」を学ばせることとなった。また、一斉学習、個別学習、協働学習の各場面においてICTを活用すること、遠隔教育の実施によって学習機会の確保と学習の幅を広げること、そのための環境整備としてGIGAスクールネットワーク等に財源措置が講じられている。

(5) デジタル教科書について

今年度より、教育課程の一部において、通常の紙の教科書に代えてデジタル教科書を使用することが可能となった（授業時数の2分の1未満）。これにより教科書の拡大、教科書への書き込み、機械音声読み上げ、文字色の変更、ルビ振りといった機能が活用できることとなり、特に特別な配慮を必要とする生徒にとっては学習上の困難を低減させることが可能となった。

(6) 生徒指導上の諸課題への対応について

自殺等の重大事態に関する調査からは、平成17年度までのいじめの定義を用いた限定解釈による認知漏れがあったことが課題として挙げられている。平成29年3月の基本方針改定以後は、けんかやふざけ合いであっても見えないところでいじめが発生している可能性を考え慎重に判断することとなっている。不登校生徒数は平成29年度において小中高合計で19万人であり、前年度から1万人増加している。中学校では生徒31人に1人が不登校という状況である。重点施策として、魅力ある学校づくり、支援シートを活用した組織的な支援体制の確立、多様で適切な教育機会の確保、教育相談体制の充実等を推進する。

(7) 特別支援教育の推進について

平成30年度の調査では、小中学校の特別支援学校教諭等免許状の保有率は30.8%であり、免許法定通信教育等を活用し現状の2倍程度を目標として取得を進めることにより、教員の資質の向上を進める。

(8) 人権教育について

ハンセン病に関する資料等を活用し、偏見や差別の解消のための適切な教育を実施することについての通知が発出されている。また、性同一性障害に係る児童生徒に対する組織的な支援体制の構築やいじめの防止、相談を通してのアウトリーチ（暴露）、カミングアウトの強要を防止することに留意が必要である。

(9) 教師の資質・能力の向上について

近年、民間企業等の採用状況や定年退職者数増加に伴う採用者数増加等により公立学校教員の採用倍率は減少傾向にあるため、働き方改革を進める等の教職の魅力向上が喫緊の課題である。

(10) 部活動について

運動部活動等への参加率は横ばいの傾向であるが、生徒数が減少、運動部設置数は変わらないという状況であり、顧問教員の約5割が担当競技の経験がない状況である。平成29年度には部活動指導員が制度化され、また、同年度に運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインをスポーツ庁が策

定、さらに、平成30年度には文化庁活動の在り方に関する総合的なガイドラインを文化庁が策定した。

(11) 学校施設について

平成30年度第1次補正予算により、令和元年度中には小中学校の普通教室の9割に空調（冷房）設備が設置される見込みである（除 北海道、青森、秋田）。

(12) 子供の貧困対策と教育の無償化・負担軽減などについて

幼児期から高等教育段階まで切れ目のない教育費負担の軽減を目指した取組を進めている。そのうち義務教育段階においては、要保護者等に係る支援として、補助対象費目に卒業アルバム代等を新設し、修学旅行費、及び、新入学児童生徒学用品費等の単価引き上げを令和2年度概算要求に組み入れた。

(13) 公立学校教職員のマイナンバーカード取得に向けた取組について

マイナンバーカードの普及と利活用を促進するため、公立学校教職員の取得促進事業を行う。具体的には啓発ポスターの配布、促進月間の設定により本年度中の一斉取得を目指す。令和3年3月からは健康保険証としての利用となるなど公共サービスにおける利活用が拡大される。

◆全体協議会

■第1研究協議題 全日中提案

全日中教育ビジョンに基づく学校からの教育改革

～生徒指導部の調査研究報告書を通して～

全日本中学校長会生徒指導部長 笛木 啓介

全日中生徒指導部においては、全日中教育ビジョンをもとに5点の推進事項を定めており、今年度は「健全育成の推進・充実のための研究」及び「当面する生徒指導上の課題への対応」の2点から「いじめ問題による自殺根絶に向けて」の提言を行った。

(1) 学校・家庭・地域社会の責任分担と連携強化

生徒の健全育成のためには、学校は社会性、家庭はしつけ、地域は規範意識をそれぞれが責任をもって育成することが求められる。

(2) 教育委員会への取組要望

課題を抱える学校への行政支援、並びに家庭の教育力向上により、教員が十分に力量を発揮できる条件整備や環境整備を強く要望していくことが重要である。

(3) 道徳教育の推進

全日中生徒指導部の調査結果からは、思いやりの気持ちや公德心が改善傾向にあることが明らかになった。全教育活動と「特別の教科 道徳」との関連を図り、道徳的な判断力と態度を育てることが大切である。

(4) 体験学習の推進

インターネット等の普及により間接体験、疑似体験が増加しているが、生徒の成長にとっては体験的な学習活動、特に社会奉仕体験活動や自然体験活動を充実させていくことが大切である。

(5) 社会の変化に対応した指導

ICT機器利用に関わる生徒指導上の問題が掲示板等からSNSへと学校や保護者が見つけにくい状況となっていることから、生徒にルールやモラルを身に付けさせる情報教育の充実が必要である。

(6) 専門家を活用した生徒指導の充実

SCが不登校未然防止やいじめの早期発見、SSWが家庭や地域社会への橋渡しを行う等、その効果が評価される一方、学校への配置日数、配置人数が十分でないとの指摘も多く、施策や活用について検討していく必要がある。

(7) コミュニケーション能力の育成

コミュニケーション能力の不足が生徒指導上の問題発生の要因であるばかりでなく、解決の際の課題にもなっている現状がある。言葉は周囲との人間関係を形成していくためにも大切なものであり、豊かな言語環境の整備とコミュニケーション能力の育成を重視していく必要がある。

■第2研究協議 中国地区提案

「明日も行きたい」と思える学校をめざして
～『自分株』を磨き『学校株』を高める～

活動を通して～

島根県出雲市立第二中学校長 伊藤 成二

「チーム学校」づくりには、職員、生徒、保護者への教育方針の説明とそれぞれの意識化、そして協働化が必要であり、その具現化のための校長としてリーダーシップの発揮の視点から実践発表を行った。

(1) キーワードを設定する

生徒一人一人が「株式会社」の社長であり、株を上げるには相応の努力と機関が必要であることを意識づけた。

また、「3つの汗」(体にかく汗、頭にかく汗、心にかく汗)、成長を促す3C(Chance, Challenge, Change)を生徒にも伝え意識の共有化を図っている。生徒指導面においては「痒い所に手の届く生徒指導」を職員に提示し、生徒指導や保護者との関わりの“合い言葉”としている。

(2) クレームを学校改善に活かす

クレームの真意を理解し、敵対ではなく子供をより良く成長させたいとの親と教師の共通の願いを共通理解し、学校改善につなげることを心がけている。

(3) 生徒の力を引き出す

中庭の手入れをするボランティア活動を通して、生徒自らが目に見える形で学校の環境整備に関する自己有用感の育成を推進したり、「イエローカード」を使い言語環境の改善を図り、大きな成果を上げた。

(4) 地域と歩む

家庭との連携を強めるために校区の幼保小中が連携し「子育て七箇条」を策定した。地域の主だった20団体、事業所100社の賛同を得ながら地域ぐるみの活動へと広げ、関係者のみならず多くの大人が子育てについて振り返り、意識の改善へと発展していった。

◆分科会

8つの分科会に分かれ、それぞれの担当地区から研究の取組と成果・課題について提案があり、熱心な研究協議が行われた。

第3分科会：北海道地区

＜よりよく生きようとする意思や

能力を育む道德教育の充実＞

・ものごとを多面的・多角的に考え、生き方についての考えを深める道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度の育成

北海道富良野市立麓郷中学校長 大角 勝之
・他の教育活動・働き方改革との関連を重視した道徳教育の充実

北海道稚内市立潮見が丘中学校長 塩崎 由雄
富良野市校長会においては、生徒の道徳性の育成を目指す道徳教育の充実を目的に3年次計画を策定し、指導体制の工夫・計画の充実、授業実践の充実、評価の工夫等を同一歩調で行っている。具体的には①道徳教育推進教師研修会の実施、②授業力向上に関する各校の実践研修の実施、③小中授業交流を進めた。成果として、①新学習指導要領の深い理解、②ZERO運動(生徒の自治的活動を通していじめを無くす活動)の一層の推進、③道徳教育の組織的取組、④教師の授業力の向上が得られた。

宗谷管内中学校長会においては、どの学校、どの教室においても一定レベルの道徳科の授業が展開されること目標として、教科書の活用方法の検証、授業実践交流、評価についての検討を進めてきた。具体的には、①道徳教育推進月間の設定と実施、②教育課程全体における道徳科の明確化、③学校課題解決のための全体計画・年間指導計画の策定、④道徳授業アンケートによる授業





改善を各校の実態に即した形で進めた。成果として、①教員の意識向上と一定レベルの授業の実施、②道徳教育推進教師の成長、③道徳科の

指導過程の統一、④生徒の意欲を引き出す評価研究の推進が得られた。

尚、大角、塩崎、両氏の提案の詳細については会誌「全道中」No.89号（令和2年3月1日発行予定）に掲載される予定である。

また、他の分科会の研究協議題と概要は次のとおりである。

第1分科会：関東甲信越地区

＜「カリキュラム・マネジメント」の推進＞

コミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育の充実により学力向上を達成した事例、及び、支援教育の視点から教育活動を充実させたことにより問題行動が減少した事例が発表された。

第2分科会：中国地区

＜「主体的・対話的で深い学び」の実現＞

共同的な学習の実施とそれを支える学習ルールの設定により主体的・対話的で深い学びを実現した事例、及び、適切な課題設定と思考ツールの活用による授業展開により生徒の論理的な思考力を育成した事例が発表された。

第4分科会：近畿地区

＜健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを

実現するための教育の充実＞

地域連携型の避難訓練や生徒が主体となる交通安全教室の実施等により教職員、生徒の安全意識を高めている事例、及び、小中連携で持久走による取組を進めたことにより体力面に加えて自己肯定感も向上した事例が発表された。

第5分科会：九州地区

＜社会的・職業的自立に向けた

キャリア教育と進路指導の充実＞

教育活動全体を通じた組織的・計画的な進路指導の実施により生徒の勤労観や職業観が向上した事例、及び、地域人材を活用した郷土学習の実施とキャリア教育の視点から授業改善を行うことで生徒の基礎的・汎用的能力を育成した事例が発表された。

第6分科会：四国地区

＜自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図る

ための自己指導能力を育成する生徒指導の充実＞

日々の行動に目標設定をさせ継続的に努力を重ねさせることにより自己実現を支える自己指導能力が向

上した事例、及び、生徒に関する情報共有を徹底化し、日常生活の課題解決の主体を教師から生徒にシフトする「教師の意識改革」への取組について発表された。

第7分科会：東海北陸地区

＜多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成＞

アンケート結果から教員研修に関する課題を探索し実務を通じたOJTやボトムアップ型の自主研修を実施している事例、互いの授業を自由に参観できる週間の設定や市教委の研修事業の積極的な活用により年代やニーズに応じた人材育成を行っている事例が発表された。

第8分科会：東北地区

＜地域との連携・協働による「チーム学校」の実現＞

東日本大震災からの復興教育、地域と連携した防災教育の実施により生徒に他者を思いやる心を育成した事例、校長会が主体となりミドルリーダー養成のための各種研修会を組織的・計画的に実施することにより、ミドルリーダーの力量や自己有用感が向上した事例が発表された。

◆アトラクション 伊勢崎市立第三中学校

ギター・マンドリン部 合唱団

ギター・マンドリン部は昭和55年の創部以来、演奏会のみならず地域への訪問演奏を行ってきた。合唱団は吹奏楽部員で構成され、吹奏楽の練習と並行して練習を重ね、各種大会出場に加え福祉施設での訪問演奏を重ねてきた。それぞれの演奏、合唱の後、合同演奏「夏の思い出」が披露され、尾瀬ヶ原湿原の情景が目に浮かぶ素晴らしい演奏に場内からは盛大な拍手が送られた。

◆全体会 大会宣言決議

◆記念講演

演題 「自己点検のススメ」

講師 作家 横山 秀夫 氏

群馬県での新聞記者の経験もある横山氏の講演は、巨大な組織に所属する公務員等は組織の力や肩書きが有する影響力を自分個人の力量と誤解する恐れがあり、特に経営者たる校長は定期的に「自己点検」する必要があることを中心とした参考になる内容であった。

◆閉会式

来年度開催となる和歌山県より、その自然、歴史、産業を背景とする風土の紹介と大会準備の進捗状況等を含めた挨拶があった。挨拶終了にあわせて、和歌山県からの参加者一同が会場の参加者に向かって一礼し、全ての日程を終了した。



〈論 文〉

「地域に開かれた教育課程」としての「地域に根ざす教育」

せたな町立大成中学校 大 口 久 克

1 はじめに

国は、「社会に開かれた教育課程」を推進するため、「コミュニティ・スクール・地域学校協働活動」を法改正をしながら精緻に進めている。「地域」が学校や社会教育に一層関わることで、学校教育はもとより広い意味での「教育」（生涯学習）を充実させ、また、地域住民がその諸活動に参画することで、「地域の活性化」をもめざす。要するに、「学校の活性化」と「地域の活性化」を統一して進めることが「社会に開かれた教育課程」の本旨と理解するならば、そのめざすところは、檜山で展開されてきた「地域に根ざす教育」の本質と通底するものと考ええる。

2 本校の概要

過疎化や少子化の時代の流れとともに生徒数は激減し、今年度は全校生徒12人の極小規模校（教職員定数は複式学級措置）となった大成中学校ではあるが、本校もまた「地域に根ざす教育」の理念を常に教育課程の基本に据えてきた。

しかし、大成区における学校が今後どのように存続するのか。それは大きな課題ではあるが、過疎化が進行し、疲弊の一途をたどる現状の中で、根ざすべき「地域」がこれからどうなるか、不安でたまらない思いをしているのは私だけではないことも一方の現実である。

3 伝統芸能「久遠神楽」の伝承

全校生徒数が少なく、また、小学校からの固定化された人間関係の中ではあるが、一人一人の生徒は思春期を全力で生きている。

地域に出ると大人からは毎日声をかけられ、生徒はそれに笑顔で返す。運動会、学校祭等、大きな行事に家族でなくても地域の方々がかけつけ、生徒の元気な姿を見ながら大きなエネルギーをもらう。地域の中の学校としての大成中学校。地域と学校が励まし励まされる関係とはこういうものではないかと日々感じている。

地域の皆さんに喜んでもらうためにがんばりたい。生徒全員が心からそう思いながら取り組んでいるのが、伝統芸能「久遠神楽」である。

大成高校が教育活動の一環として伝承していた「久遠神楽」であるが、大成高校が閉校後、平成17年、それを大成中学校で引き取ることになった。そ

れ以来「総合的な学習の時間」で扱っている「久遠神楽」。太田神社祭、学校祭、敬老会、町芸能発表会と地域に演舞を披露している。生徒数減少のため、昨年度からは笛の部門を先生方が担当し、生徒とともに奮闘している姿に地域からの評価が高い。

毎回の練習では、各部門については先輩が後輩に指導することが定着している。また、練習時には「久遠神楽保存会」の方々（生徒は「大先輩」と呼ぶ）も毎回参加し、最後に総括的なアドバイスをいただく。

地域の伝統芸能を一生懸命演舞する生徒を見つめる地域の方々は、生徒の生き生きする姿からたくさんの元気をもらい、無条件の喜びを感じている。

本校は今年度4月から「コミュニティ・スクール」として発足したが、この地域と本校の関係を改めて振り返ってみたときに、すでに事実上のコミュニティ・スクールであったのではないかと考えている。

4 自分を大切にしてくれる地域をより良いものに

いつの時代も人間は他の者と共同しながらコミュニティとしての地域社会を大切にし、自分たちの社会を「持続可能」にしようとしてきた。そのことが「人間らしく生きる」ということの証しであることを暗に確信しながらである。

そして、そのコミュニティの一番の思いは「子供は地域の宝」ということに違いない。子供がいなくなればコミュニティが「持続可能」でなくなるからである。

過疎化が進む大成。その中で地域住民がこれまで意識の内外で大切にしてきた「子供は地域の宝」という思いを、伝統芸能の伝承等、地域に根ざす教育活動を展開する中で子供たちは全身で感じ取っているのではないか。

自分のことを大切にしてくれる地域。だからこそこの地域（社会）をよりよく創り出したい。その思いは、「社会に開かれた教育課程」で示されている「豊かな人生を切り拓いていくために求められる資質・能力」に寄与するものと考ええる。

〈論 文〉

生徒の道徳性の向上を目指して ～「道徳」における言語活動の充実を通して～

壮瞥町立壮瞥中学校 深 松 一 宏

1 はじめに

壮瞥町は優美な洞爺湖、大地のエネルギーを感じる昭和金山・有珠山などの大自然（世界ジオパークに認定）に恵まれた町で、果樹・野菜などを栽培する農業と観光の町である。子供の教育に熱心な保護者や地域住民が多く、学校の教育活動に対してとても協力的である。

そのような恵まれた環境の中で、これまで伝え合うことができる力の育成を目指して、言語活動の充実に取り組んできた。また、総合的な学習の時間を中心にして、家庭や地域の協力のもと、農業・観光・世界ジオパークなどの地域にある教育資源や人材を活用した特色ある教育活動を展開している。

2 「考え、議論する道徳」の実現に向けて

いじめ問題が大きく取り上げられている昨今、人の痛みを感じ取れる人間性の育成や他人を差別したり、見下したりしない心の育成が道徳教育に求められている。また、教育活動全体の取組を通して自己肯定感や自己有用感を高めることで、生徒一人一人の自尊感情の高まりにつながる指導を工夫することも大切である。

道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実させ、様々な課題に対応できる資質・能力を育むために、多面的・多角的に考え、議論していく「考え、議論する道徳」の授業を展開する。そして、道徳における言語活動を充実させて、道徳的諸価値についての自覚を深める授業の充実を図り、生徒の道徳性を養うことが重要であると考えている。

3 本校の取組内容

(1) 校内研修による道徳教育の充実

学校が組織体として道徳教育を一体となって取り組むために、校内研修に関する校長の方針を明確に示すとともに、道徳教育推進教師の役割を明確にする。そして、全教師が指導力を発揮し、協力して道徳教育を展開できる体制を整えることが肝要である。そこで、道徳を校内研修の領域とし、担任だけでなく副担任も含めた教師全員による授業公開及び研究協議を実施するなど、校内研修の充実を図った。

(2) 本校生徒の道徳性に関わる実態把握

①新道徳性検査 HUMANⅢの活用

道徳的心情や道徳的判断力について、全国の傾向と比較した。

②子供理解支援ツール「ほっと」の活用

4～10月の間に計4回実施して、生徒の心の動きを客観的に把握する手だてとして活用した。

(3) 授業づくりにおける工夫や改善

①表現できる場の設定

ア. ペアやグループ学習での表現

イ. 役割演技による解決策の表現

ウ. シミュレーションによる応用問題の解決

エ. スキル学習の導入

オ. マナーや礼儀作法の学習

②教材活用の工夫

ア. 教材の有効活用

イ. 教材の分析

ウ. 教材の提示方法

③発問の構成

ア. 主体的に考えるための発問の工夫

教材の問題を他人事として捉えるのではなく、自分のこととして置き換えて考えさせるために、発問を工夫することが大切になる。

イ. 問題解決を促す発問の工夫

生徒が道徳的諸価値や判断基準を基にして多面的・多角的に考え、公平公正に議論するようにさせるために、教師から多様な効果的な発問をすることが重要である。

④評価の工夫

ア. 学習の形成的評価

イ. 学習の自己評価

ウ. 学習の総括的評価

エ. 道徳的実践の評価

オ. 関係者による多面的評価

4 成果と課題

「特別の教科 道徳」が全面実施となり、道徳教育推進教師を中核として、授業を要とした道徳教育を進めている。また、道徳教育の重点目標や重点内容項目に基づいた年間指導計画に従って、担任と副担任で協力・分担しながら授業を展開している。今後は、「考え、議論する道徳」の意味を再確認させながら、生徒の成長の姿をどのように評価していくかについて、教師の理解を深めたい。また、教師側の授業評価についても実態に応じた具体的な項目を示すなどして、授業改善に役立てたいと考えている。



〈論 文〉

学校教育活動を支える「不易」と「流行」を大切にしたい教育を目指して

池田町立池田中学校 豊田利一

1 はじめに

池田町は、十勝平野の中央やや東寄りに位置し、総面積は約370平方キロメートル、人口約6,700人、農業を基盤産業とした中で、道東唯一のワイン造りに取り組んでいる。町内には小学校3校、中学校1校と高等学校1校がある。

本校は、昭和22年に開校し、平成24年の高島中学校統合の際に、地元産のカラマツ材がふんだんに使われた新校舎を建設し、恵まれた教育環境の中で教育活動が行われている。現在、生徒数136人、学級は9学級設置されている。本校の教育目標は「全力をつくす生徒」であり、開校当時から知・徳・体のバランスの取れた教育が展開され、オリンピック選手や歌手等、自分の夢を実現させた卒業生も多く輩出している。

2 学校経営を進めるにあたって

本校では、「確かな学力の向上」「心身の充実」「社会性の育成」を「チーム池田中」として組織的に実践する教育活動を推進するとともに、「小中9年間の学びの連続性」及び「社会に開かれた教育課程」を介した家庭や地域とのつながり等を充実させた「地域とともに魅力あるゆるぎない池田中学校」の構築を目指している。

これらの理念を踏まえ、教育課程を編成・実施・評価し、改善していくための「カリキュラム・マネジメント」を確立させるために、本校では今まで積み重ねてきた「不易」の教育活動と、これから求められる「流行」の教育活動を見つめ直し、組織的且つ協働的な体制を構築した中で、学校経営を推進している。

3 「不易」と「流行」

本年は、本校の教育活動をより充実させるために、「検証・改善」を図ってきた。「不易」の教育は本校教育の土台であり、今まで生徒一人一人が「分かる喜び」と「学ぶ楽しさ」が実感できる質の高い授業や、「豊かな人間性」や「たくましい身体」、そして「社会性」を育む教育活動として、また「流行」の教育は「持続可能な社会」で必要とされる「生きる力」を育む教育として位置付けている。

4 具体的な取組

(1) 学校経営を支える組織力の強化

組織的に学校課題の解決を図る学校経営を行うために、学校組織に「特別委員会」と「校務運営委

員会」を位置付け、多方向から分掌・学年の意見を吸い上げ、教員一人一人の人材育成と組織の活性化・能率化を図った。特に、分掌・学年の中に隠れる傾向があった「学力」については「学力向上委員会」を新たに立ち上げ、分析・検証と改善について共通理解が図れる環境を作った。

(2) 授業力向上を図る組織的な研修

教職員の授業力向上を図ることは、学校経営上の中核になる。生徒に「確かな学力」を身に付けさせるために、同じベクトルの授業を組織的に取り組むことが大切である。

①全国学力・学習状況調査結果を活用した授業

過去数年の調査から、「情報を読み取る力」「正確に書く力」「資料を活用する力」に課題がある一方、「読書が好き」「読書時間が長い」という結果を受け、図書室の資料を活用した授業を教育課程に位置づけ、取組を推進した。その研修成果については、今年度の「十勝管内学校図書館活用促進研修会」にて、発表した。（授業公開・研究概要説明）

②学びガイドを活用した授業

4月当初に「学習の手引き(シラバス)」を配布しているが、授業での活用が曖昧であった。教師・生徒の学習の指標を明確にするために、今年度から単元毎の「目標」「観点別学習内容」「自己評価」「振り返り」を記載した「学びガイド」を作成し、単元毎に確認できるようにした。この研究成果については、来年度の「北海道キャリア教育・進路指導研究大会十勝大会」で発表する。

(3) 校種間・地域の連携

これからの学校教育には、横軸である地域資源・人材の活用を中心とした地域連携と、縦軸である義務教育9年間を見据えた小中連携の充実も不可欠である。本校では、コミュニティ・スクールを活用した地域との連携（ふるさと教育・福祉教育等）、小中連携（学習規律等）を推進している。

5 おわりに

今後も、「不易」と「流行」を意識した学校経営を行い、今までの伝統を継承するとともに、時代の要請に応えられる教育を目指し、子供たちが生き生きと成長し、夢と希望をもって未来に羽ばたくための礎を築いていく学校でありたいと考えている。

(特別寄稿)

「文豪」の時代

市立小樽文学館館長
玉 川 薫

市立小樽文学館は1978年11月に開館しており、今年開館41年目を迎えた。公立総合文学資料館として現存するなかでは、最も古い文学館である。

裏を返せば、「文学館」というジャンルのミュージアムはそれほど歴史が浅いのであり、ここ30年ほどで全国に600を超える文学館が設立されたということのほうが特異な事態ともいえる。

1980年代から90年代にかけて全国を席卷した感のある「文学館ブーム」だが、基盤となっているのが更にその一昔前、文学全集が相次いで発行され、地域の文学運動も活発だった「文学の時代」なので、全国に文学館が行き渡ったころにはとうに喪われていたという皮肉なことになっていた。

そうした各地の文学館が入館者の減少に悩み、乏しい予算と人員で奮闘しているのだが、この数年、面白い現象が起き始めた。「文豪ブーム」である。

コミック、アニメ、ライトノベル、様々な形態で広がっているのだが、人気を決定づけたのはインターネットブラウザゲームであり、漱石、鷗外、有島、啄木、小林多喜二ら実在の「文豪」をモデルとしたキャラクターが、古今の名作を破壊せんとする悪しき侵略者に立ち向かうという物語である。

荒唐無稽だが、それぞれの「文豪」の能力や弱点、交流、駆使する武器や身にまとう衣装など、隅々まで実際の彼らの作品や逸話が織り込まれているので、熱中したファンは煩を厭わず、その背景と原典を求めて全国の文学館を渡り歩くのである。

小樽文学館では昨年、このゲームとタイアップして、「小樽に残した文豪の足跡展」を催した。ゲームを模した「文豪バー」とキャラクターパネルを背景に、「文豪コスプレ」で記念写真を撮り、インスタに投稿する彼女らに響き渡る向きもあろうが、誰よりも熱心に展示された原稿や書簡を凝視し、リサイクル古本の文学全集端本を何よりもの成果品として、いそいそと持ち帰ったのである。

全国各地から集まった初対面の彼女らが情報を交換し、また各地の文学館に向かうさまもSNSに随時発信されていった。

時代はこのように変わっている。純文学はエンターテインメントだ。文学館はこれまで同様、その素材を生真面目に提供しつづければいい。楽しむのはあくまで「お客様」なのだから。

歴史に学ぶ

～語り継ぐ『赤いまり』の体験～

釧路管内町村教育委員会連絡協議会
副会長 内 村 定 之

安政元年(1854年)11月5日、現在の和歌山県広川町の村民濱口梧陵(はまぐちごりょう)は、海水のひき方や井戸水の急激な減少により、安政南海地震による大津波を予期し、村民を避難させるため、自分の田んぼで収穫された稲わらに火を投じ、急を知らせ、村人を救った。

これは、津波対策の教訓として語り継がれる「稲むらの火」という逸話である。

この逸話に基づき、第70回国連総会本会議(平成27年12月開催)で「世界津波の日」を11月5日と定める決議がなされた。この決議は、幾多の災害の経験や教訓をもつ日本からの提案によるものである。

過去に大きな被害があった日ではなく、早期警報と伝統的知識の活用によって人々の命が救われた日を「世界津波の日」とし、世界中の防災意識の向上を願ったのである。

本年9月8・9日の2日間にわたり、本町の霧多布高等学校に27ヵ国約150人の海外の高校生を迎え、「『世界津波の日』2019高校生サミットin北海道スタディーツアー」が実施された。スタディーツアーでは、新聞紙でスリッパを作る防災グッズ制作などの防災意識を高める活動はもちろん、書道や餅つきなどの日本文化に親しむ特別授業も行い、本校生徒も海外の高校生も交流を深めながら学びあった。

歓迎行事の一環として、霧多布高等学校1年生により、チリ沖地震津波伝承紙芝居『赤いまり』を英訳した劇が上演された。『赤いまり』とは、本町に11名もの犠牲者を出した1960年のチリ地震津波についての記録をまとめた文集である。当時の児童・生徒ら約60人の体験談が収められており、犠牲者の娘が遊んでいた赤いまりが津波の後、浜辺に打ち上げられたことから悲しみの象徴としてこのように名付けられた。

荒れ果てし被害の跡に子等集い学びの庭を掃き清めおり。

この短歌は、霧多布同人会によるもので『赤いまり』に収められている。被害の大きさや悲しみだけでなく、そこから立ち上がる人間の強さに心打たれる。同時に、あらゆる災害に対し、被害を最小限にとどめる努力の重要性を思わずにはいられない。

私たちは、自らの経験から学ぶだけでなく、歴史から学ぶという意識を強くもち、次世代のために語り継いでいかねばならないのである。

(特別寄稿)

文 芸

子供たちの「うれしい」を育む

稚貝放流

釧路市教育委員会
教育長 岡 部 義 孝湧別町立湧別中学校
久 間 博 文

わが市、わが町、地元の子供たちの様子や活躍を伝える報道を目にするときの喜びは、地域を問わず共通のものではないだろうか。

今年度、釧路市の子供たちの様子を報じた三つの記事が目をつけた。いずれも、小学生と中学生の交流活動を報じたものである。

第一は、中学校の生徒会役員が校区の小学校で実施したあいさつ運動。児童玄関まで足を運んで活動した中学生のコメントには「小学生からあいさつをしてくれることが増えた。親しみを持ってきているのかなど、うれしい気持ちになる。」とあった。第二は、小学校の運動会を手伝ったボランティア部の中学生。「子供たちがみんな笑顔で、うれしい気持ちになった。」と述べられている。そして第三はボランティアで小学校の夏休み学習会の学習支援に携わった中学生。「みんながどんどん問題に挑戦してくれるので、うれしく感じた。」と結ばれている。

いずれの記事も「うれしい」気持ちが語られた出来事であるが、そもそも小学生のために活動する中で「うれしい」と感じる事ができた中学生たちの心の在り様に、私自身もまた、うれしさを感じずにはいられなかったのである。

人間は自ら体験した物事から様々な感情を抱くが誰かのために何かをする体験から得られた「うれしい」感情というものは、周囲の人に向けた優しさや感謝、奉仕の心につながるに違いない。人と触れ合う体験から生まれた感情は、子供たちにとって何ものにも代えがたい大きな心の糧となるはずである。三つの記事にあるような、子供たちの「うれしい」気持ちが、学校教育はもとより家庭や地域社会の中でたくさん育まれる釧路市でありたいと思う。

今年度、全国の報道では、子供たちが犠牲となる悲しい事件・事故が絶え間なく報じられていた気がする。残念ながらその多くは学校、家庭、地域社会の今を反映した厳しい現実の一面なのである。今一度、私たち大人自身が子供たちにとって最も大切な環境そのものであることを認識し、責任の重さを自覚せねばならない。

令和の未来が、子供たちの「うれしい」気持ちであふれる世の中になってほしいと願わずにはいられない。今こそ向かう先のビジョンを共有し、学校、家庭、地域社会が力を尽くすときである。

毎年5月に湧別漁協から「ほたて稚貝放流のお知らせ」という文書が届く。サロマ湖内で育てた稚貝をオホーツク海に放流する5月中旬の10日間、午前4時から正午まで湖各地区から湧別港までの道路を数百台のトラックが止め処なく往復する。生徒や教職員へ注意喚起を依頼する文書だ。

本校PTA会長が漁師だったため、私は教頭とともに稚貝放流に係る作業体験の機会を得た。稚貝はいくつかの部屋に仕切られた円柱状の養殖用網籠を湖内に吊して育てられる。一つの部屋に入れる稚貝の数は決められている。一粒一粒に均等に栄養が行き渡る環境を作り、1年間で直径約5cmに成長する。

湖内の港に行くと、数十隻の早番の船が蜘蛛の子を散らすように各養殖場に向かい、遅番の船が港に戻ってきた。私は遅番の船上で網籠を振るい、稚貝を放流用の籠に移す作業を手伝った。この時期は網走の東農大生アルバイト等で人手を確保している。作業開始の無線が入る。時間が厳密で迅速な作業が必要だった。早番と遅番の2班制により、鮮度を維持して漁港に届けるシステムが効率よく循環されていた。放流用の籠を陸揚げしトラックに移す。船はまた養殖場に向かう。トラックは計測場で出荷重量の計測とサンプル採取を行う。稚貝の大きさと重量によって稚貝を育てた漁師への報酬額が決まる。測定を終え、トラックは12km離れた湧別漁港に向かった。港にはトラック百台以上が列を成して放流用の漁船への積み込みを待っていた。港は腕の太い男たちであふれていた。港の活気に感動した。

放流1ヶ月前、結氷した湖内の砕氷作業が行われる。厚さ60cmの氷で砕氷を断念することもある。また、湖内14地点の水深や透明度、水深(0m, 1m, 2m, 3m, 5m, 湖底)ごとの水温と塩分濃度を公表している。稚貝の生育環境を把握し、5月を迎えている。漁協は、数値に基づく計画的な生産管理による持続的漁業の確立を目指している。

漁協は今年2億5千万の稚貝を放流した。流氷に閉ざされるオホーツク海の厳しさの中で成長したほたてが3年後の日本や世界の食を支える。学校も可能性とチャンスを最大化させ、持続可能な社会を牽引する人材を育成すべく教育活動の展開が求められている。未来を担う子供たち一人一人を大切にたくましく育てたいという意を更に強くした。



子供向け雑誌の付録から見えること

帯広市立大空中学校 黒島 俊一

知育雑誌「幼稚園」という冊子があります。私事ですが、幼い頃から親が定期購読してくれて、毎月手元に届くのを楽しみにしていました。おめあては本誌よりも付録なのですが、それは当時から幼稚園児が一人で上手く作れるような代物ではなく、きちんと作るには結構な難易度で、毎月父親につくってもらい、つくれないけど、「あそぶ」わくわく感をもって、喜び遊んでいた記憶が残っています。

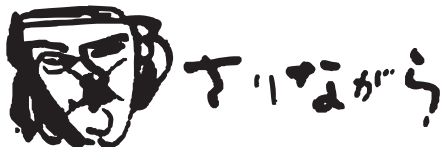
そんな「幼稚園」ですが、この付録が大変な進化を遂げています。最近では、企業とタイアップした「コンビニエンスストアのATM」や「牛井チェーン店の牛井づくりゲーム」。ペーパークラフトで実に精巧につくられて本物そっくり。そのクオリティの高さは目を見張ります。もはやままごとの領域を超え、職業体験ならぬ職業訓練的な様子さえ感じます。

一方、世の中では就業希望を有しない「ニート」や「引きこもり」との重複などが社会問題化していたり、犯罪につながる悲しい出来事が発生したり、心が痛むところです。幼少期向け雑誌の付録の高度化、とうてい子供だけではつくりにくい高い難易度、クオリティの高さは、こうした現状と決して無関係ではないよう

な気がします。

こうした中、日本の学校教育が直面する喫緊の課題として、小中高等学校での学びが将来に直結していないという指摘を耳にします。全面实施を間近に控えた次期学習指導要領には、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という理念を学校と社会とが共有し、どのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするか教育課程で明確にして、社会との連携及び協働により・・・と社会との連携の重要性が強く謳われています。このことは子供たちの未来を見据え、社会で生きていく力を養う「キャリア教育」も大きな柱となります。学校が地域社会と手をつなぎつつ、地域社会と連携し、子供たちが逞しく地域社会で生きていく力を養うキャリア教育の充実は、地域や企業、家庭との対話を深め、社会総ぐるみで進める意識を醸成します。

本校は2年後に義務教育学校としての開校を控えています。学校で学んだことが社会で生きることにつながり、子供たちの幸せな将来と、自立への道筋をつける新しい教育を「つくる」わくわく感をもって、確かな実践を進めたいと願うのです。



「実るほど頭を垂れる稲穂かな」

根室市立厚床小中学校 高橋 昭

Webマガジンの「TRANS. Biz」によると、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」は、稲が成長すると実を付け、その重みで実（頭）の部分が垂れ下がってくることから、立派に成長した人間、つまり人格者ほど頭の低い謙虚な姿勢であるということの意味することわざで、「頭を垂れる」という言葉自体に「相手に敬意を払って自分を謙る」という意味があるので、稲が立派に成長するにしたがって、稲穂の部分（稲が実を付けている部分）が垂れ下がってくる様子を、稲と稲穂を成長していく人間に見立てて例えられているということだ。

今から20年ほど前、女子バレーボール少年団の名ばかりの監督をやっていたときにコーチとして指導していただいていた女性の方に、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」の意味を問われた。答えを返す間もなく、「将来、教頭、校長になったときに、威張ってふんぞり返っていたら、だめなんだよ。上の立場になるほど謙虚にさ」と諭された。そのときはまだ管理職という選択肢は微塵もなかったのであるが、負けん気が少々とんがっていた自分には金言であった。それ以来、「～さんの～ところが素晴らしい」などと謙虚な姿勢で、どん

な人物からも自分のもち得ないところを学んできたように思われる。

先日、市の校長会で会長から資料が配付された。大見出しには「バカな管理職は『俺は部下より優秀』という～そんな上司には誰もついてこない」と記されていた。また、中見出しには「優れた管理職はまず『自己の成長』を重視する」「全社員のなかで『CEOが一番学んでいる』会社」「マネージャーは『あがり』のポストではない」「優れたマネージャーは皆『謙虚な学習者』」と記されている。見出しの一部を見るだけでも全文は想像いただけるだろう。

私は優れた管理職ではない。だから、たくさんの人から素晴らしいところを頂き、いろいろ学ばなければならない。稲が成長し頭が垂れるというより、中身がないけれど、謙虚に学び続ける自分でありたいと思う。ただ、人から学ぶが、人のまねはしないと決めている。唯一無二である各の個性をまねなどできない。学んだことを周囲の状況と自分の性格やできる行動などと照らし合わせ分析し、どのような手だてを講じれば良いのか考えるのも、教えを頂いた方への敬意ではなからうか。

